

医療、福祉、社会運動の境域で

―二〇世紀初頭ニューヨークの訪問看護婦たち

松原宏之

はじめに

一八九三年、リリアン・ウォールドがメアリー・ブリュースターとともにアメリカ合衆国ニューヨーク市に設立したのがヘンリー通りセツルメントである。彼女らが望んだのは、下町ローワーイーストサイドに暮らす移民たちの生活を支えることであった。東ヨーロッパ諸地域から続々とやって来た移民たちの暮らしはつましく、不安定であった。貧困は身近であり、劣悪な居住環境と衛生状態は、移民たちの生存をおびやかす。訪問看護を事業の中心に据えたヘンリー通りセツルメントは、かれらの命綱として急速に成

長していった。現在も存続するこの組織は、活動範囲を広げながらニューヨークの住民に貴重な社会サービスを提供し続けている¹⁾。

さてこの組織とその活動をいかに位置づけるべきだろうか、あらためてこう問うてみるのが本稿の課題である。多くの住民を助けたサービスとともに、ウォールドら訪問看護婦たちは社会的、政治的な発言もまた活発であった。かれらの活動の総体をたどり直しながら、訪問看護婦たちが二〇世紀初頭のアメリカにおいていかなる役割を果たしたのかを検討していきたい。

本テーマについて重要なのは、コロンビア大学図書館、

コロンビア大学医科学図書館、ニューヨーク公立図書館所蔵のリリアン・ウォルドおよびヘンリー通りセツルメント関連史料である。一九〇〇年刊行の『アメリカ看護誌 *American Journal of Nursing*』とあわせて、ヘンリー通りセツルメントをはじめとする訪問看護に携わった者たちの経験を追っていききたい。

一 ヘンリー通りセツルメントの史的位置づけを探して

(一) 公衆衛生と規律

リリアン・ウォルドらの活動に関する研究蓄積は分厚い。社会事業史においては、慈善活動からセツルメント運動におよぶ一九世紀から二〇世紀初頭にかけての展開はソーシャルワークという領域の確立に決定的であった。看護の歴史や、近年あらためて注目の高まるホームケア史でも、訪問看護の事業化にいち早く成功したヘンリー通りセツルメントは先駆例として挙げられる。その成長は順調であったと言えるだろう。一九〇七年に事業所をニューヨーク市内一〇カ所まで増設し、専従看護婦二五名が六万件ほどの訪問を実施している。一九一一年に実現したメトロポリタン生命との提携はヘンリー通りセツルメントの財源を整えただけでなく、訪問看護という事業が全国に広まっ

ていくときのモデルを提供した。この年、専従看護婦は倍強の五五名を数え、訪問数もほぼ三倍の一七万五千件に及んだ。一九二六年には事業所は一八カ所に増え、専従看護婦は一六四名、三五万弱の訪問件数である。その辣腕で知られるウォルドについては、シカゴのジェーン・アダムズには及ばないまでも伝記的な成果も多い。社会改良運動を牽引した女性たちの経験としても位置づけうる。²²⁾

近年の「福祉の混合体論」は、こうした民間団体への注目をあらたにしている。国家の役割を重視した二〇世紀型福祉国家論を再考するこの研究群によれば、国家が一元的に市民の福祉を担うという構想は一九世紀末からいくつかの地域で一時的に目指され、実現したに過ぎない。人びとの福祉と生存は歴史により広範なアクターが担ってきたのであり、種々の中間団体の役割が大きかった。ここにおいて、セツルメントのような民間組織もまた「福祉の混合体」の大きな一角を占めたとみるべきであろう。福祉国家前史や社会史的な一事例にとどまらず、福祉史の全体像のなかでヘンリー通りセツルメントの取り組みもまた理解されねばならない。こうした関心は、従来から研究を蓄積してきた社会事業史との出会い直しへもつながっている。²³⁾

その上であらためて、そのセツルメントがいかなる権力を持ったかを検討する必要がある。²⁴⁾ 近年の研究で大きな軸

だったのは、セツルメントをはじめとする社会改良運動が実態として中産階級的な規律を移民や労働者たちに押しつけ、その過程を通して運動家たちにも下層民たちにも規範の内面化をうながしていったという着眼であった。諸運動の取り組みは社会問題を緩和する一方で、人々を管理する機能も果たしたとされる。田中拓道が指摘したように、「福祉の混合体」を構成するひとつとしてセツルメントを列挙するにとどまらずに、その社会的、政治的な意味を検討する必要がある⁵³。

この見方に即せば、訪問看護事業を柱としたヘンリー通りセツルメントはこの規律化のエージェントに他ならな⁵⁴いとも言えるだろう。感染症への懸念が、その予防を名目に、移民や労働者たちの住居、生活、家族やコミュニティのあり方、娯楽、性愛、労働にいたる広範な局面への介入を正当化していった。医療機関で診察・治療をうける余裕のない低所得者たちのもとに向いて世話を施し、予防のための生活指導をも行う訪問看護婦たちは、かれら下層民たちの暮らしの場にまで浸透してあるべき規範を提示することになるからである。

(二) 長い一九世紀とアメリカ政治文化の変動

― 規律論の再検討

しかし、こうした規律論については疑義が呈されてもいる。歴史的な文脈においてより具体的に考えると、規範や秩序のありようは規律論が提示するよりも複雑な様相をみせるからである⁵⁵。

一九世紀末から二〇世紀へといたるアメリカの具体状況に照らすなら、規律論が想定する中産階級的な規範やその権威が大きく揺らいでいたことに注意が必要である。セツルメントをはじめとする民間団体が台頭したのは、それまでアメリカ社会を主導してきた人びとやその制度が機能不全を露呈した時期でもあった。

すなわち、公衆衛生学の台頭をうながしたのは感染症の蔓延であり高い乳幼児死亡率であった。生存の危機である。問題の巢窟とみなされた低所得層の住居や居住区も野放しであった。貧困問題は深刻であり、それは労働争議という以上に既存秩序へのときに暴力も辞さない異議申し立てへと展開しつつあった。背景には企業の寡占化ともなう産業化の急進捗があり、都市の膨張があり、アメリカ共和国の統合力と行く末とには懸念が示されていた。

なにより深刻なのは、こうした事態に有効に対処する術をもたないアメリカの体制であった。「弱い国家」と称さ

れるアメリカの国家行政機構は貧弱であった。徳のある個人の努力に多くをゆだねるこの国の基本設計は、大規模な社会問題に対して組織的に対処するための制度や人材やノウハウを欠いている。行政府は小さく、社会政策を担うための機構に乏しい。議会改選のたびに官僚もまた入れ替わり、選挙協力者への恩賞という側面をもったその任用からは経験とノウハウをもった行政吏集団が育ちがたい。産業化がすすむ一九世紀アメリカ社会は、わき出してくる社会問題に対応する意思も能力も不足していたのである^⑧。

ここに、人びとの生存を保障できない社会は政体として欠陥をかかえているのではないかという疑義が浮上していく。一足早く社会政策制度を整え始める西ヨーロッパ諸国あるいは実験の後発国での進捗を横目に、アメリカ社会は立ち遅れていた^⑨。

こうしたなかで、公衆衛生学をはじめ専門知をかかげて対応を図る人びとには二面性があった。一面でかれらは、事態への対処を通してたがのゆるんだ社会を統制しなおそうとする者であった。規律論が想定する中産階級の規範の擁護者である。しかし他面で、既存制度の不備を指摘してその刷新を狙うという意味では、体制への手厳しい批判者もまた存在した。医療関係者のなかには都市社会の酷薄さと現体制の機能不全をよく知る者がいた。シード・スコツ

チポルらによれば、子どもや母親たちを守れとこの政治の空白に名乗りを上げたのが女性団体であった。既存の政治秩序の外縁にいたキリスト教婦人禁酒同盟や婦人クラブを嚆矢に、種々の民間団体こそがアメリカ型福祉国家への道先導したという。体制擁護というよりもその改編とそこの主導権奪取を射程に入れる者たちであった^⑩。

規律論とその再考というふたつの研究潮流に照らして、ではリリアン・ウォルドラ訪問看護婦たちはいかなる役割を果たしたと言うべきだろうか。「福祉の混合体」を構成した数あるアクターのなかで訪問看護婦が占めた地位を明らかにしていかねばならない。

二 ヘンリー通りセツルメントの政治文化史へ

―医療、福祉、社会運動の領域から―

(一) 訪問看護婦とは誰か―周縁性と自負

ヘンリー通りセツルメントが二〇世紀初頭ニューヨーク市の社会秩序になにをもたらしたのかを精査しようとするなら、訪問看護婦とは何者かとあらためて問うておく価値があるだろう。彼女たちは一概に規律主体としての中産階級とは言いがたい多面性をはらんでいた。

なるほど訪問看護婦は台頭する公衆衛生学の実践者であ

り中産階級の規範を移民街に持ち込むエージェントという顔を持っていた。ところが他方で、看護婦たちの出自は広範であった。労働者階級の女性たちが手伝いや民間療法の担い手として参入する例は珍しくない。経営上の要請から労働者階級の女性たちをも受け入れた看護婦学校はその一因であった。

看護婦たちのジェンダーもまた疎外要因であった。専門性の確立を図る当時の医学界は、看護婦たちの専門化には消極的であった。そもそも、社会的地位を確立しようとする一九世紀後半以降の男性医師たちの働きかけから女性たち一般が排除されがちであった。高等教育への機会を阻まれた女医が現場に立つことは容易でなかった。看護婦たちはここにおいて男性医師の補助者としての位置を割り当てられる。

訪問看護婦たちは看護婦のなかでもいっそう周縁的な存在であった。彼女たちは専門性を備えた医療者というよりも、裕福な家庭に雇われる介助者とみなされ、病院を中心に試みられる医学の専門化過程から取り残されるような位置に置かれがちであった。専門性確立のために中産階級女性が範型になった一方で、実際には広範な階層の女たちが看護婦として働くことも不利であった。医療に携わる女性たち、それをもっとも周縁化された訪問看護婦たちを中

産階級とひとくくりにすることには慎重にならざるを得ない。

しかし他方で、訪問看護婦たちが単なる周縁者でもなかったのが興味深い。

近年の医学史の成果は、医学そのものの地位がそれほどすみやかに確立したわけではなかったことをあきらかにしている。実のところ、細菌が発見されるまでの医療は感染防止の手がかりに乏しい。細菌説が提出された後も、それが実際の医療に効力を発揮するには抗生物質の登場を待たねばならないし、それが十分な効果を得るのは第二次世界大戦の頃にすぎない。医学校制度の整備が進む一方で、アメリカ医学協会は非正規医との競合に苦心し続けた。病院は依然として危険な場とみなされ、実践上も非正規医、民間医療、伝統医療に対して優位を占めきれなかったからである。

医療現場の状況に鑑みれば、看護婦の地位についてもその叙述は複雑さを増す。たしかに看護婦や訪問看護婦は男性医師に匹敵するほどの専門性を確立できたわけではない。しかし看護の社会史研究が当時の医療現場に見いだすのは、医学の不備であり、男性医師たちの力不足であり、対照的にも看護婦たちの機転でもある。

自身も看護婦でもある看護史家パトリシア・ドアントニ

才は、教育課程において医学知に接し、その知の意義と限界とを臨床において体感し、その混乱した現場で力量を發揮する経験は、看護婦たちが固有の自信をいだく契機になつただろうと示唆する。男性医師でなく、看護婦こそが、机上の医科学をその長所と限界とともにおさえたうえで、医科学の有効な実践者たりえたというわけである¹⁵⁾。

訪問看護婦たちの証言は、こうした見立てが一定程度妥当なのをうかがわせる。男性医師たちからの冷遇にあつてもなお看護婦たちの自負の念は強い。看護そして医療の現場は、教科書通りにはまったくいかなかった。設備や薬は貧弱であり、患者の家族や隣人がときに介入し、事態は常に不規則であつた。この混乱した現場の「笑つてしまうほどのやりくり」は教育課程ではなく実地に「学ばねならぬもの」であり、医師でなく訪問看護婦にしかできないことである¹⁶⁾。一方において医学とその用語に通じ、他方で現場に習熟し、患者とその周囲とのあいだで「通訳」の役割を果たしうる訪問看護婦の腕の見せ所である。「それら諸問題をひとりで解決せねばならない」彼女は、「独創的で引き出しの多い」者でなければならぬし、「彼女自身の広範な主体性を發揮せねばならない」のである¹⁸⁾。

このように見てくるなら、訪問看護婦たちの立場の多面性を指摘することができるだろう。中産階級的規律のエー

ジェントでもある彼女たちは、しかし他方で階層やジェンダーや専門性の面ではときに周縁化された。そして逆に、現場での経験に立脚して固有の権威を誇りさえする者でもあつた。

なかでも訪問看護に固有のこの自負の念なしには、リアン・ウォルドがその道を選んだ理由は理解しがたい。一八六七年にドイツ系ユダヤ人の裕福な家庭に生まれ育ち、手厚い教育を受けた女性である。高等教育への進学で障害を感じつつ、一八八九年にニューヨーク看護病院学校に入学し、翌年は女性医学大学に進んだ末に、ウォルドは訪問看護事業に取り組み始めたのであつた。既存社会制度のなかで自分の働き場を探したウォルドが、他でもない訪問看護にこそ魅力を感じたということを銘記しておこう。満たされない野心と、既存社会の不備や不条理への気づきを抱えたこの中産階級女性である。彼女が見いだしたのは、残されたわずかな余白であつたのか、それとも反撃の足場であるうか¹⁹⁾。

(二) 訪問看護婦たちと社会改良運動

— 訪問看護の社会的広がり

この訪問看護婦たちが自らの仕事をどうとらえていたのかを見ていきたい。特徴的なのは、彼女たちがその職責を

狭義の医療を越える社会状況との関連で位置づけたことである。ヘンリー通りセツルメントを率いたウォルドやラヴィニア・ドックといった強烈な個性に限らず、多くの論者たちが共有した見解であった。

一九〇〇年刊行開始の『アメリカ看護誌』から看護婦たちの関心のありようをうかがうことができる。看護婦たちの専門化・組織化の画期とされる同誌が、登録看護婦制度や看護学校といった専門職地位の確立についてと、看護技能の共有に誌面を割いたのは当然と言えよう。興味深いのはもうひとつの大きなテーマ群として、患者たちに関わる生活・社会状況への関心が示されていることである。同誌の「革新主義運動 (Progressive Movements)」コーナーや訪問看護についての連載が示すように、看護婦たちの関心は、狭義の看護にとどまらない広がりを持っていた。

イサドラ・シャピロは、人類の進歩の鍵は公衆衛生にあり、それを担いうるのは看護婦なのだ²¹と強調した。シャピロが示唆するのは疾病の克服のために社会環境を改善することであり、看護婦の「関心は患者に限定されてはならない」のであり、「患者の周囲」にまで注意が向けられるべきと論じた。狭義の医療にとどまらず社会・人類の福祉に献身すべき「職業としての人道主義者 humanitarian」である看護婦は、「本質的に改良主義者」だとシャピロは論

じた。したがって看護婦たちは、教育を受けて専門性を備えるのはもちろんのこと、「社会構想、社会意識を持たねばならない。コミュニティの向上のためにあらゆる試みに積極的に参加せねばならない」とされた²²。

狭義の医療にとどまらない社会的側面までを手当すべきだとすれば、とりわけ訪問看護婦たちは医療者の周縁でなくその社会との接点ゆえに最重要だとメイベル・ジェイコブスは記した。社会の福祉には「単なる訓練された看護婦でなく訓練された訪問看護婦」こそが決定的に重要だと自負したのであった²³。

公衆衛生、とりわけ予防医学の意義を説いたポール・リッガーもまた同様に、訪問看護婦に特別な使命があると述べた。訪問看護婦の実践は、患者だけでなく、コミュニティに対しても責任を負うものであり、それは医師には手が届かない領域だとリッガーは言う。患者だけでなく、その家族や近隣者をも教育し、医師と素人との架け橋として不可欠の役割を担うのが訪問看護婦だと論じた²⁴。

男性医師ながら看護婦の役割について能弁なロウマンは、現場から得られる事実の重視という看護学の発展を支えた方法に即していくのが重要だと述べる。医療の現場にあっては看護は科学的なものであり、予防を射程に入れらるならそれは社会科学であり、専門職であるとともに人

文学的であり人への愛 (Philanthropic) でもあると喝破した。社会改良への志向は、看護婦の職能からして必然だと位置づけた恰好である。訪問看護協会はその努力の一環であり、「看護婦の治療者から予防者への成長」ゆえに社会のハブとして医療をひとに引き寄せるのだという²³⁾。

「看護婦は、おそらくは厄介にも言うべきではあるが、単に病人や死に行く者の世話をするというよりも包括的な職務がある」とジェーン・ヒッチコックは述べた。「看護とは、医療面だけでなく社会面にも目を配るものなのだ」と言うのは訪問看護の代表的教科書をものしたアニー・ブレイナードであった²⁴⁾。繰り返されたこうした表明は、訪問看護婦たちが自らの職務の固有性を見つけ出そうとするなかで（ことによっては苦し紛れに）編み出されたものかもしれない。しかし、この訪問看護婦定義が彼女らの現場での経験に拠っていたらどうかは指摘できよう。机上の医学や温室のような病院内では想像もつかない現場において、自らが有能だったという経験。狭義の医療を越えた状況が自分たちこそ見えているという確信。一見すれば随分と気負った訪問看護婦たちの自己規定は、彼女たちの日常から生まれた定義だったと見るなら了解可能ではなからうか。

こうした素地に照らせば、ヘンリー通りセツルメントの

訪問看護婦たちが広範な社会問題について発言し、さらに踏み込んで各種社会運動への関与を志向したのは決して唐突でなかった。ヘンリー通りセツルメントの指導的看護婦の一人ドックにとって、社会状況の放置もやむを得ないと考えるのは「世界と社会についての古く静態的な理解」であった。社会改良のための積極的行動を模索すべきであった²⁵⁾。

取り組むべき問題は看護にとどまらない多岐にわたる。『アメリカ看護誌』創刊号でもドックは、法の不完全さを知り、適切な改善を求めよと説いた。とくに女性や児童労働の規制は実効性を欠いており、それを正すのは（国家などではなく）われわれ看護婦なのだと言う。労働運動に言及した別稿では、看護を職務とする労働者の責任として労働運動への賛意と関与とを彼女は説いた。『専門』に関連すること以外に心を閉ざしてしまいうなら、われわれは一面的な専門家に成り下がり、ちょうどフランスの尼僧たちが病院においてそうなったようにいずれ有用性を失ってしまうだろう」と言うのである。よく生きる (to have a good life) ためには教育、労働時間、賃金が重要であり、それに尽くさねば訪問看護婦はその意義を失ってしまうとドックは論じた²⁶⁾。「公共悪／公衆衛生 public ill」の治療に取り組んできた看護婦としては、婦人参政権問題への支持もま

た社会科学的事実が要請する必然だとされた。²⁶⁾

この延長線上に、ヘンリー通りセツルメントがしばしば示したロシア革命や社会主義運動への関心も整理することができるだろうか。ウォルドはロシア革命のある祝賀会でヘンリー通りセツルメント代表として講演している。²⁷⁾同セツルメント開設二五周年に当たっても、ごく当然のように言祝がれたのはセツルメントがロシア革命の支持者たち²⁸⁾に会合の場を提供したことであつた。狭義の看護業務だけでなく、コミュニケーションのありように関心を払うべきウォルドらにとつて、地域住民が社会党に強く共鳴するとすればそれは尊重すべきこととされた。理事会議事録のレベルでごく当然のように言及されるこうした記録は、同セツルメントにとつて政治もが日常的な業務のすぐそばにあつたことをうかがわせる。

おわりに

訪問看護婦たちの社会改良志向や政治運動への関心や参与は訪問看護という事業のなかでいかなる意味を持ったのだろうか。はたしてそれはどれほどの深度を持ったものだったのだろうか。それは体制補完的で、下層民たちを規律していくようなものであつたらうか。あるいは既存の体

制に対するラディカルな挑戦であつたのだろうか。この点を確かめるにはより実態に即した検討が必要になるが、本稿では第一次世界大戦期のリリアン・ウォルド講演記録を一瞥して仮の見通しを立てておこう。

一方ではニューヨーク市行政・保健局との関係を深め、メトロポリタン生命保険とも連携する実務家の顔も備えるウォルドである。全米黒人地位向上協会の支持者であり、反戦運動の指導者でもあつたこの人物は、一九一七年にアメリカが第一次世界大戦に参戦してからは一転して、全米国防会議傘下の看護委員会の組織に同意して戦争遂行の支援にまわつた。反戦平和運動にとどまつた者とは袂を分かつたのである。

しかし他方でウォルドは、こうした戦時協力を体制への全面的包摂とは区別しようとしたように思われる。訪問看護婦学生に向けた講義のなかで、「戦時²⁹⁾ "situation"」に対応するときであっても、「民主主義と（その真の意味で民主主義の全面的展開である）国際主義の根源的原理に則つて」セツルメントは活動するとウォルドは宣言した。その「民主主義」の本義とはなにかと問うなら、ウォルドにとつてそれは国家ではなくそこに住む子どもたちに奉仕することであつた。「かれらの生活の維持とかれらの世話が国家の根底的な福祉にとつてもっとも中心的だ」と彼女は論

じる。この観点からウォールドは、昨今の「アメリカ化運動」が本末転倒であり「愛国心のもつとも皮相な発露」にすぎないと切つて捨てるのであった。⁽¹⁾

戦時にあつてもウォールドは体制への包摂を拒んで粘る。その粘り腰を支えたのが、ここでもウォールドの経験と実績なのは印象深い。訪問看護の現場で自分たちこそが社会の核心と接しているという自信こそが、戦時動員の圧力がヘンリー通りセツルメントにもかかってくる場面においてすら訪問看護の事業を区別せしめる。社会における主導権をやすやすとは国家に譲り渡さず、自分たちこそがその担い手だと自負したのである。

即断と過大評価は慎まねばなるまい。しかし訪問看護婦たちのラディカリズムには彼女たちの経験が培った基盤があったと仮説を立てることは許されるだろう。ヘンリー通りセツルメントの政治的志向を外在的な性質とみるのではなく、彼女たちの看護実践についての社会史研究を足場に、訪問看護の取り組みを看護から社会運動にいたる広がりできとらえ直す方向が見えてくる。ヘンリー通りセツルメントが二〇世紀初頭ニューヨークそしてアメリカ社会に及ぼした影響を測るための、政治文化史の構想である。

註

- (1) Henry Street Settlement, "Certificate of Incorporation," 1904, box 130, Visiting Nurse Service of New York Records, Archives & Special Collections, Columbia University Health Sciences Library [hereafter VNSNY Records, CU-HSL]; "Manual of the Visiting Nurse Service Administered by Henry Street Settlement," 1920, box 87, Wald Papers, Columbia University, Rare Books & Manuscript Library; リリアン・ウォルド (岡部里美訳) 『ハンリー・ストリートの家ーリリアン・ウォルドと地域看護の母と自伝』日本看護協会出版会「二〇〇四年〔一九一五〕」。現在でも活発なその事業展開の一端はハンリー通りセントルメントのウェブサイトに¹⁾かまひひかがえ。 <http://www.henrystreet.org/>
- (2) "Summary Statistics, 1907-1920," box 209, fo. 1, VNSNY Records, CU-HSL; Karen Buhler-Wilkerson, *No Place Like Home: A History of Nursing and Home Care in the United States* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2001); K. Buhler-Wilkerson, "Bringing Care to the People: Lillian Wald's Legacy to Public Health Nursing," *American Journal of Public Health* 83, no. 12(1993); Doris Daniels, *Always a Sister: The Feminism of Lillian D. Wald* (New York: Feminist Press at the City University of New York, 1989); Allen Freeman Davis, *Spearheads for Reform; the Social Settlements and the Progressive Movement, 1890-1914* (New York: Oxford University Press, 1967); Marjorie N. Feld, *Lillian Wald: A Biography* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2008); Susan Rita Ruel, "Lillian Wald: A Pioneer of Home Healthcare in the United States," *Home Healthcare Nurse* 32, no. 10(2014); ウォルター・トットナー (古川孝順訳) 『アメリカ社会福祉の歴史ー救貧法から福祉国家へ』川島書店 一九七八年〔一九七四〕。
- (3) 岡村東洋光・高田美・金澤周作編著『英国福祉ボランティアズムの起源ー資本・コミュニティ・国家』ミネルヴァ書房、二〇一二年。高田美・中野智世編著『福祉 (近代ヨーロッパの探究15)』ミネルヴァ書房、二〇一二年。
- (4) 田中拓道『ヨーロッパ貧困史・福祉史研究の方法と課題 (特集 歴史のなかの「貧困」と「生存」を問い直すー都市をフィールドとして)』『歴史学研究』八八七号 (二〇一一年) 一―九二九頁。
- (5) Lynn Dumenil, "Women's Reform Organizations and Wartime Mobilization in World War I-Era Los Angeles," *The Journal of the Gilded Age and Progressive Era* 10, no. 2(2011); 松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」ー「アメリカ化」時代のシタイズメンシップ』東京大学出版会、二〇〇七年。
- (6) 宝月理恵「戦後日本における歯科衛生士の専門職化ー口腔医療をめぐる支配管轄権の変容から」『保健医療社会学論集』第二三巻一号 (二〇一二年) 八五―九五頁; Deborah Lupton, *The Imperative of Health: Public Health and the Regulated Body* (London: Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications, 1995); 松原宏之「社会の護持と改編ー二〇世紀初頭アメリカの性衛生学者モローをめぐる」服藤早苗

医療・福祉、社会運動の境域で (松原)

三成美保編『権力と身体』明石書店、二〇一一年。

- (ㄋ) Alan Dawley, *Changing the World: American Progressives in War and Revolution* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2003); Maureen A. Flanagan, *America Reformed: Progressives and Progressivisms, 1890s-1920s* (New York: Oxford University Press, 2007); Nell Irvin Painter, *Standing at Armageddon: The United States, 1877-1919*, 1st ed. (New York: W.W. Norton, 1987).
- (ㄎ) Stephen Skowronek, *Building a New American State: The Expansion of National Administrative Capacities, 1877-1920* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982); Michael Willrich, *City of Courts: Socializing Justice in Progressive Era Chicago* (Cambridge: New York: Cambridge University Press, 2003).
- (ㄌ) James T. Kloppenberg, *Uncertain Victory: Social Democracy and Progressivism in European and American Thought, 1870-1920* (New York: Oxford University Press, 1986).
- (ㄍ) Sonya Michel and Seth Koven, *Mothers of a New World: Maternalist Politics and the Origins of Welfare States* (New York: Routledge, 1993); Robyn Muncy, *Creating a Female Dominion in American Reform, 1890-1935* (New York: Oxford University Press, 1991); Theda Skocpol, *Social Policy in the United States: Future Possibilities in Historical Perspective*, Princeton Studies in American Politics (Princeton: Princeton University Press, 1995);

Alexandra Stern and Howard Markel, eds., *Formative Years: Children's Health in the United States, 1880-2000* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2002).

- (ㄎ) Cynthia Anne Connolly, "'I Am a Trained Nurse': The Nursing Identity of Anarchist and Radical Emma Goldman," *Nursing History Review* 18, no. 1 (2010); Patricia D'Antonio, *American Nursing: A History of Knowledge, Authority, and the Meaning of Work* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2010).

(ㄎ) Bridget Lusk and Julie Fisher Robertson, "US Organized Medicine's Perspective of Nursing: Review of the Journal of the American Medical Association, 1883-1935," in *New Directions in the History of Nursing: International Perspectives*, ed. Barbara Mortimer and Susan McGann (London: New York: Routledge, 2005); Barbara Melosh, "The Physician's Hand": *Work Culture and Conflict in American Nursing* (Philadelphia: Temple University Press, 1982); Susan Reverby, *Ordered to Care: The Dilemma of American Nursing, 1850-1945* (Cambridge [Cambridgeshire]: New York: Cambridge University Press, 1987).

(ㄎ) Mary Jo Deegan, *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918* (New Brunswick (U.S.A.): Transaction Books, 1988); Mary Jo Deegan, *Race, Hull-House, and the University of Chicago: A New Conscience against Ancient Evils* (Westport, Ct.: Praeger, 2002); Regina Markell Morantz-Sanchez, *Sympathy and Science: Wom-*

- en *Physicians in American Medicine* (New York: Oxford University Press, 1985); Ellen Singer More, *Restoring the Balance: Women Physicians and the Profession of Medicine, 1850-1995* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1999).
- (14) ショーン・ダブニー (網野豊訳) 『アメリカ医学の歴史: ヒポクラテスから医科学へ』二瓶社、二〇〇二年 [一九九三年] 第一八章 小野直子「アメリカ合衆国における出産の病院化と産科学の台頭」『富山大学人文学部紀要』二七号 (二〇〇二年) 三七—五七頁。
- (15) Sarah Elise Abrams, “Seeking Jurisdiction: A Sociological Perspective on Rockefeller Foundation Activities in Nursing in the 1920s,” in *Nursing History and the Politics of Welfare*, ed. Anne Marie Rafferty, Jane Robinson, and Ruth Elkan (London and New York: Routledge, 1997); Lusk and Robertson, “US Organized Medicine’s Perspective of Nursing: Review of the Journal of the American Medical Association, 1883-1935”; Melosh, “*The Physician’s Hand*”: *Work Culture and Conflict in American Nursing*.
- (16) D’Antonio, *American Nursing: A History of Knowledge, Authority, and the Meaning of Work*; Arlene W. Keeling, “Carrying Ointments and Even Pills!” Medicines in the Work of Henry Street Settlement Visiting Nurses, 1893-1944,” *Nursing History Review* 14, no. 1 (2005), chap. 2.
- (17) Eliza J. Moore, “Visiting Nursing” *The American Journal of Nursing* 1, no. 1 (1900), 18-19.
- (18) John H. Lowman, “The Evolution and the Development of the Nurse,” *The American Journal of Nursing* 8, no. 1 (1907), 13.
- (19) Marjorie N. Feld, *Lillian Wald: A Biography* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2008), chap. 1.
- (20) Isadore Shapiro, “The Nurse as a Social Factor,” *The American Journal of Nursing* 15, no. 3 (1914), 187-88, 187, 189.
- (21) Mabel Jacques, “The Part of the District or Visiting Nurse in the Social Work of to-Day,” *The American Journal of Nursing* 10, no. 7 (1910).
- (22) Paul H. Ringer, “The Responsibility of the Trained Nurse to the Community,” *The American Journal of Nursing* 10, no. 12 (1910).
- (23) Lowman, “The Evolution and the Development of the Nurse,” 14.
- (24) Jane Elizabeth Hitchcock, “Report of the Sub-Committee on Visiting Nurses,” *Proceedings of the National Conference of Charities and Correction* (1905); Annie M. Brainard, *Organization of Public Health Nursing* (New York: Macmillan Co., 1921 [1919]).
- トナーズは「*衆衛生看護のための“nursing done for the health of the public”*」の強調すべき点の種の言明は枚挙にいとまがない。Mary Sewall Gardner, *Public Health Nursing* (New York: The Macmillan company, 1916); Lillian D. Wald, “Address by the President of the National Organization for Public Health Nursing” In “Proceedings of the Sixteenth Annual

- al Convention of the American Nurses' Association," *The American Journal of Nursing* 13, no. 12 (1913).
- (25) L. L. Dock, "Is Exclusion Effective?," *The American Journal of Nursing* 1, no. 7 (1901), 471.
- (26) Lavinia L. Dock, "What We May Expect from the Law," *The American Journal of Nursing* 1, no. 1 (1900).
- (27) Lavinia L. Dock, "Status of the Nurse in the Working World" In "Proceedings of the Sixteenth Annual Convention of the American Nurses' Association," *The American Journal of Nursing* 13, no. 12 (1913), 975.
- (28) M. Elma Dame, "The Suffrage," *The American Journal of Nursing* 9, no. 4 (1909).
- (29) "Minutes of the Board of Directors, April 17, 1917," box 131, VNSNY Records, CU-HSL.
- (30) "Miss Lewison's Report of the Celebration of the 25th Anniversary," Directors' Meeting, October 16, 1917, box 131, VNSNY Records, CU-HSL.
- (31) Lillian Wald, "The Settlement & Its Relation to the Present Situation," HSS [Henry Street Settlement] Training School, 11/9/1917, box 191, VNSNY Records, CU-HSL.
- (本学文学部教授)